

英語教育における歌の意義と課題

The Meaning and Subject of Songs in English Education

瀧口 優*

研究
ノート

概要

小学校英語科がスタートするにあたって検定教科書にもたくさんの歌が使われている。しかも教材のメインとして位置付いている。一方中学校や高校ではどうか。英語の授業に歌が使われることは戦前から存在していたが、その多くは課外や補習であった。戦後になってもその位置づけは変らなかつたが、1980年代より英語の授業に歌が積極的に使われるようになった。その意味について論文や実践から読み取り、今後の英語の授業に生かしたい。

キーワード：英語教育 歌 授業 教材

1. 研究の背景と目的

2020年4月より小学校5年生と6年生に「英語科」が導入され、3月まで行われていた英語活動は小学校3年生と4年生に移行されることになった。小学校英語の問題についてはここでは触れないが、「英語科」の教科書ではどの出版社においても教材として英語の歌が取り上げられており、英語教材として評価されている。

一方、中学校や高校等において英語の歌が授業に取り入れられてきた歴史を振り返ると、そこには紆余曲折があり、必ずしも正当に評価されてきたわけではない。それは国のレベルでも民間のレベルでも同様である。また英語の歌をどのように扱うのかについて様々な方法が実践的には示され

ているが、その扱い方について定式化したものがない。またなぜ歌を使うことが意味があるのかという根拠を示すことも十分に行われていない。

本稿では小学校で積極的に教材として取り上げられている英語の歌というものが、中学校や高校、あるいは大学においてどのような意味を持っているのか、その意義と課題について整理し、英語教育における教材としての英語の歌について位置づけを確認したい。

2. 研究の方法

はじめに英語教育における歌の活用について述べている論文を調査し、その意義や課題について触れているものを先行研究として整理する。それを踏まえて、日本の英語教育における歌の活用についての歩みを戦前にたどってまとめる。戦後については3期に分けて扱いの変化について論じ、その流れを概観する。また国の政策に係わって学習指導要領を振り返り、教科書における歌の扱いについて触れる。最後に全体として、英語教育に英語の歌を扱うことの意義についてまとめたい。

3. 先行研究として

CiNiiの検索で「英語教育」「英語の歌」で179件(実質50件)がヒットし、そのうち歌を扱うことの全体に触れているのは10件ほどである。寺島隆吉氏は英語の歌をもとにして「英音法」について展開する。英語の音の出し方についての規則性であるが、なぜ英語の歌が重要なのかという点においては展開されていない(寺島1987)。寺島

*保育科

氏は大学の英語の授業についても触れているが、英音法という概念から出発している（寺島1986）。長谷川潔・小池直己氏は放送英語の教育的効果に関する研究で、英語の歌を用いた英語文型の指導について展開している。その中で、「英語の歌のほとんどは同じ単語や構文が繰り返されることが多く、くどくどと説明せずすんなりと教えやすい」（長谷川・小池1985）として英語の歌と構文や単語の学習の面での意義に触れているが、中学生と大学生を対象としたものである。早田武四郎氏は「大学英語教育における英語の歌の効用」として、英語の歌を上手に歌うことと英語学習の関係として、定期テストの得点の向上を促進するという観点で論じている（早田1994）。しかしなぜそのような結果になったのかについての分析ができていない。「歌を利用した英語コミュニケーション教育の報告－名古屋工業大学における試み－」（松浦他2018）は、大学における歌を利用した「活きた」英語コミュニケーション教育の試みとして、オペラの発声法などをもとにして指導を行っているが、やや限られた分野の取り組みとして一般化できない内容となっている。また早瀬氏は英語学習の指導における「かな表記」による英語ポピュラー・ソングの導入について論じている（早瀬他2005）。英語の曲の選択などについて触れながら文字と音との関係を展開しているが、かな表記の問題に集約しすぎているので英語学習の意義という点での展開が弱くなっている。

少し専門的な分野では「空耳フレーズを用いた外国語発音教育に向けた一検討」（羽鹿他2018）として、外国語の音の聞き取りを母語の音から関連させて把握する方法について論じているが、研究者自身の検証であり、生徒や学生の学習にどのように活用できるかについては触れられていない。LASKOWSKI氏は英語の歌の教育的価値を高めるための教室での活用法について論じており、その内容と方法は整理されているが、やや活動を中心にしたものとなっており、なぜ英語の歌を取り上げるのかについての展開が弱い

（LASKOWSKI・1995）。円城氏らは英語教育の翻訳の役割について論じ、英語の歌の翻訳を学生に行わせる中での効果について触れている。しかしなぜ歌が必要なのかについては展開されていない（円城他2014）。岩下氏は高等専門学校における洋画や洋楽、ドラマの活用について実践報告をしており、その中で学生の反応を通して英語の授業に歌などを取り入れる意味に触れているが部分的である（岩下2016）。Collinsは学生の記述的な英作文能力を歌によってどのように高めるかを書いているが、作文という内容に限られている（Collins 2018）。樋口氏は語いの修得に洋楽が効果的かどうか等について調べて報告しているが、学生へのアンケートと語いの分析が中心である（樋口2018）。

なおTim Murphey氏は日本の大学に籍を置き、英語の歌についての理論や実践を紹介し、言語学習における音楽と歌の重要性について展開しているが、展開している例証は外国のものが多く。

総じて各部分では展開されながら、英語の歌を英語の授業に活用するにあたって総合的にまとめたものはない。

4. 英語の授業における歌の歴史

(1) 戦前

英語の授業に歌を取り入れるという方法がいつごろから始まったのかを調べてみたが、戦前の文書には次のようなくだりがある。

- ・なほ、本校においては第二学年の劣等生約20名と五学年の専門学校受験生約三十名に対して毎週夫々一回又は二回の補習授業をなす。また第一第二学期に一回宛校内英語練習会を開き、二学年以上の各組の生徒に一種目宛、暗誦、対話、英語唱歌演説等をなさしめ第三学期の学芸会には二つの英語劇を行い、何れも授業の延長としてなるべく多数の出演を奨励している（後略）。（野津文雄1933,p.487）
- ・女の学校に来て生徒にせがまれるものに、英語の唱歌がある。せめて‘ABC Song,’‘Sweet

Sweet Home, "Last Rose of Summer" 位は何時でも調子外れにならぬ位に歌いたいものである。(星山三郎1933, p.492)

- ・ 師範生は、幸いなことには、中学生などと異なって自分で楽譜が読めたりオルガン、ピアノが弾けたりするのだからこの方面などをよく利用して英語の歌の適当なものを沢山教えてやることもまた英語への興味を増すと共に英語教授の能力を高める一良策であろう。(水田清恵1935, p.493)
- ・ 又女生徒は音楽が好きだから、何時も生徒の喜びそうな英語唱歌を授けることが望ましい。始終、"Old Black Joe" や "Sweet Home" では厭きられるので、音程に近い筆者は恐縮の至りであるが、予め、同僚に習ったり或いは生徒に歌詞を説明し後は音楽に堪能な生徒を助手にして練習させることもできる。(大内修二郎1936, p.524)

以上に加えて、1937(昭和12)年の第14回英語教授研究大会では、公開授業を行った東京府立第三高等女学校教諭の佐藤浩氏が、最後の6分間で教科書の終わりについている "Twinkle, Twinkle, Little Star" の stanza を六つ斉唱して終わり、あまりの見事さに拍手も鳴り止まぬほどで、一同に深い感動を与えた旨が書かれてある(英語教育史資料 p.805)。

以上総合すると、歌は戦前から授業に取り入れられていたが、①女学校や師範学校であったこと、②課外や補習で行われたこと、③英語の苦手な生徒が意識されていた、という点が特徴であったといえる。また取り上げられている歌は、多くが唱歌や童謡、民謡である。

(2) 戦後

戦後については3期に分けた。1970年代半ばまでの「導入期」とそれから21世紀初頭までの「発展期」、そして現代までの「転換期」である。「導入期」は英語の歌を教室で扱うにあたっての機器が存在しない時代であり、教師の「技」で勝負し

た時代で、音楽としてはフォークソングが中心であった。「発展期」はカセットテープやCDなど録音、再生の機器が発達した時代で、ビートルズをはじめとしたロックやポップスなど音楽の幅が大きく広がった。そして「転換期」は電波等を活用し、映像等も含めて自由に歌が扱えるようになった時代である。以下区分に沿って特徴をまとめたい。

①導入期

英語の歌は、戦後当初は徐々に英語の授業に取り入れられるようになってきている、というのが実際のところである。戦後「教え子を二度と戦場に送らない」をスローガンに組織された日本教職員組合は、1951年に第1回教育研究全国集会(以下「全国教研」)を開催したが、その第6回集会(1956)には外国語の分科会が初めて設置され、4日間にわたって報告や討議が行われた。その中で「授業中レクリエーションのひとつとして英語の歌を大いに利用している一福島」(梶木1956)というのがあり、歌が英語の授業に有用であるという点が確認されている。しかしあくまでも「レクリエーション的」であり、早期英語教育の分野を除くと、英語の歌が授業のメインに座ることはなかったようである。

1960年代当初、Teachers' Manual Seriesとして英語教育の指導書が出されているが、その中で第3巻の『英語の入門期』では「歌、童謡、または単なる語呂でも、入門期の準備段階においてはコーラスで発音を練習させるときに有効な方法である事が分かるだろう」(松峰1960)とまとめられ、第9巻の『英語のレクリエーション』では「まず、品性を高め、情操を養う上からも健全で高尚な歌を指導すべきであろう。これらの歌を正しく歌い味わう間に養われる音感発音やリズムにいつそうの関心を持たせ、語いを豊富にし、英語国民の生活に触れることができよう」(垣田直己1960)とその効用に触れている。英語教育のテキストに歌が取り上げられている背景には、授業で英語の

歌を取り上げることによって授業が活性化するのではないかという思いが読み取れる。扱い方についても触れているので、著者自らが授業の中で扱っている様子がかがえる。

1952（昭和27）年3月、文部省は「中学校高等学校学習指導要領 外国語科英語編（試案）」を発表したが、第2章「英語教育課程の構成」のⅡ「教育課程構成における単元法」の単元例B—中学校3学年または高等学校第1学年の言語機能上の目標の一つとして「歌を歌う能力を養う」を入れている（単元例Cの高等学校3年では入っていない）。

中学校においては1958（昭和33）年以降の指導要領からは、歌に関する記述が全く消えてしまっている。高校においては、昭和35年の改訂ではじめて英語A、英語Bに分けられた際に英語Aの「指導計画作成及び指導上の留意事項」の(5)として、「聞くこと話すことの領域においては、歌を歌わせたり、対話をさせたり、電話で話させたりすることなどもよい、・・・」と歌についての表現が見られる（英語Bにはない）。しかし1970（昭和45）年改訂では、新たに設けられた初級英語を含め、歌に関する表現はまったく見られない。1978（昭和53）年には英語Ⅰ、英語Ⅱ、英語ⅡA、ⅡB、ⅡCに細分化されたが、そのいずれにも歌は出てこない。

②発展期

英語の歌を授業の中心に置き、歌の読み取りから文法、そして歌唱指導まで一貫し、さらに中学校3年間を見通した実践を展開したのは大阪の中学校教員上村敦氏である。「Folk Song を授業に取り入れて」（上村1974）という報告で、英語の歌が、とりわけアメリカ民衆のこころの歌である Folk Song が、生徒の心をつかみ、生徒に学ぶ意欲、生きる意欲をあたえるものであることを示した。そして毎年のように新英語教育研究会の大会で歌に関する発表を行い、1982年に『たのしい英語の歌』（三友社出版）を出版したが、まえがきで次のように述べている。「人は誰でも歌が好きです。

人前では歌えないという人でも、折に触れて口ずさむ歌を持っています。だれでも“心の歌”を持っています。」として歌の本質に触れながら、授業に主教材として取り入れることが提起されている。

上村氏の提起を受けて1980年代に入ると英語の授業に英語の歌を取り入れる実践は飛躍的に増えていく。1980年には埼玉の中学校教員米蒸健一氏が「英語の歌と学習意欲」（米蒸1980）を報告し、同じく埼玉の中学校教員山門義武氏が「歌の授業」（山門1980）を発表している。その背景としてカセットテープの普及がある。それまでレコードはあったが、それを教室で使うのはむずかしく、せいぜいギターなどの楽器を使って演奏しながら歌う程度であった。もしくは戦前のように教師の歌唱力で生徒を引きつける方法に頼らざるを得なかった。カセットテープの普及を背景に英語の歌を授業に取り入れる実践が増え、英語教育誌としても特集で取り組むところが出てきた。「新英語教育」（三友社出版）は1980年第二特集として「英語の歌と授業」を初めて取り上げ、5人の実践が報告されている。1984年10月号（No.181）で「授業に生かす英語の歌」を特集し、4人の実践と上記の上村氏の「英語の歌—何を、なぜ？」にはじまって、中学生や高校生への指導の取り組みが載せられている。「子どもたちとの共有財産を」とした座談会では司会の江口元夫氏が中学校教員の立場から「歌は人間の感性と深く関わりを持っていくということじゃないでしょうか。同じ芸術といっても絵画や文学などより根源的という感じがしますね」と結んでいる。

そして「新英語教育」誌ではその後1989年の3月号（NO.234）において特集「心をひらく英語の歌」で作曲家の服部公一氏の「ことばとメロディー」に続く座談会と3つの実践、1993年の2月号（NO.282）で特集「カラオケ時代に英語の歌を」で福田昇八氏の「英語の歌と英語教育」と4つの実践、1998年2月号（NO.342）で特集「歌は授業のエッセンス」で Tim Murphey 氏へのイ

インタビュー「英語の歌は授業を変え、教師を変え、生徒を変える」と5つの実践と歌の一覧を載せている。更に英語の歌の関連記事を時系列で載せているが、ほぼ2ヶ月に1回は歌に関する記事が載せられていることもまとめてある。その他連載している「教科書の創造的な扱い」（中学校3種類及び高校1種類）でも、授業に英語の歌を取り入れている報告が多い。そして新しい歌が次々と紹介されている。

なお、浅川和也氏他が「英語教育における国際理解教育の事例Ⅱ—メッセージのある英語の歌を使って」（浅川他1997）としてワークショップを行っているが、その中で英語の歌を授業に用いる意義を5点にわたって提示している。

この発展期に改訂された学習指導要領において、英語の歌についての言及はまったくされていない。

③転換期

1990年代半ばにインターネットが商業化された。「新英語教育」は1994年から「授業に歌を」のコーナーを毎月連載し、2020年の現在も隔月ではあるが同じタイトルで載せられている（2020年4月号で218回）がほとんど全て実際の授業で取り扱ったものであり、曲数としてもほぼ200曲に達する。21世紀をむかえてインターネットの普及とともに英語の歌の扱い方も大きな変化をとげてきている。カセットテープからCDの時代を経て、YouTubeから映像を含めて直接取り込むようになると、若い教員は様々な取り組みを始めるようになる。教室のパソコンとインターネット環境があればどのような歌でもほぼ手に入るようになり、授業での実践も大きな変化をしてきている。

新英語教育の2007年4月号は「歌でつながる英語の授業」を特集し、それまでのカセットテープから iPod Shuffle を使って授業が行われている様子が報告されている（宇野2007）。また2018年11月号の「卒業しても忘れない歌と英詩」では YouTube 動画を使った実践が紹介されている（小

美濃2018）。

この時期に学習指導要領は3回改訂されたが、小学校英語活動及び小学校英語を除いて英語の歌は扱われていない。中学校や高校の英語学習において、学習指導要領では英語の歌は対象外であった。

5. なぜ英語の歌が英語の授業に使われるのか

(1) 生徒・学生からの反応

雑誌や書籍で英語の歌を使うことについて子どもたちや学生にアンケートをとったものがあるが、何れも圧倒的に賛成が多い。時にはクラス全員が賛成と回答することもある。「英語の歌は“授業を楽しくさせる魔法」で、中学生が191人中94%が英語の歌を行うことを支持しているという報告がある（根岸2006）。前述の小美濃報告では163名中156名（96%）が同じように支持している。理由として「英語を聞いて英語のリズムを養えるから」「知っている曲が流れると楽しいから」「口ずさむと結構覚えるし、それがまた楽しくなる」「まだ習っていない単語の予習になる」等があげられている。また根岸報告では「単語や文などの英語が身につく」「発音が良くなる」などがあげられている。

まとめてみるとまずは、①英語の歌が楽しいと感じること、②英語の授業の雰囲気作りになること、③発音リズムの練習になる、④歌詞を通して文化を学ぶ、⑤歌は覚えると忘れない、等に分類される。この中で⑤の「歌は覚えたら忘れない」について更に深めたい。

(2) 生理・身体・脳との関わり

Tim Murphey 氏は「The Song Stuck in my Head Phenomenon: A Melodic Din in the LAD(Language Acquisition Device)の中で、歌が覚えやすく忘れにくいということを「音楽が頭に残る自然現象」もしくは「音楽的な鳴り響き」と表現している。ことばに比べてメロディーは頭に残り、そのメロディーにつられてことばが定着していくという生理学的な分析である（Tim

Murphey1990)。また The Din Phenomenon (「音楽的な鳴り響き現象」)として取り上げた Guerrero は、「第二言語における心理的な準備 (Mental Rehearsal in the Second Language)」としてまとめ、Krashen の「音楽的な鳴り響き仮説 (Din Hypothesis)」を紹介している。Krashen の Din Hypothesis は歌を取り上げたものではないが、適切なインプットがないとアウトプットに結びつかないということにつながっている。小さいときに覚えた歌が高齢になっても歌えるのはメロディーと共に適切なインプットで記憶されているからであり、歌詞と音が結びついているからである。

「人類が創造した音の世界の産物には言葉と音楽がある」として外国語学習と音楽の関係を日本人の脳の特徴に関連付けて説明した角田忠信氏は「全人類が等しく言葉を扱う左の言語脳と音楽に優位な音楽脳とに機能の分担が分かれていることは2つの脳の存在する意義を考察する場合の基本的な根拠となる」として、日本人の音感覚に言及した(角田1978)。外国語使用と脳の働きでは「日本語が左脳に偏した言語であるために、日本人は左脳を酷使した状況に陥り易いと考えられる」として、「我々がより創造的であるためには、同時に西欧の右脳の文化も積極的に利用することを忘れてはなるまい」とまとめ、日本人の外国語学習に「日本人にとっては西洋楽器の音が西欧人とは違った意味で西欧人以上に重要な意味を持ってくる」と示唆している。

(3) Contents (Reading) に関わって

歌には背景や意味がある。言い換えれば歌は哲学を持っている。しかもそこにメロディーがあり、背景、意味そしてメロディーを合せて人の心と体に定着していく。歌を歌っているとき、本人は歌詞とメロディーの中に溶け込んでいく。歌詞の意味を深く理解すればするほど、それは心の中に定着し、自分の言葉として表現されていく。母語の場合は文化的な感覚も含めて歌に寄り添うことができる。外国語の場合はどうか。実践か

ら読み取ってみたい。

冒頭に紹介した上村氏は民衆の歌であるフォークソングの意味と背景をしっかりと伝え、その結果生徒達が心を込めて歌っていた。山本健治氏は Nikka Costa が歌う「It's Your Dream」を授業で扱い、高校生がその歌詞とメロディーに感激して大きな声で歌った様子を紹介した。そして歌を授業で導入するときの視点を3つ紹介している。1つは内容・メロディー・リズム・歌手の歌唱力等が生徒の心を inspire するもの、2つめはメロディーとリズムに裏打ちされた英語の歌詞が覚えやすく、定着しやすいもの、そして3つめに全員が心を開いて大きな声で歌えるもの、である(山本健治1989)。

熊本大学の福田昇八氏は「ロックを使った英語授業」の中でビートルズの「Yesterday」を、発音練習から語法活用、そして訳詞へと展開して、学生にメロディーに合わせた訳を作らせる授業を紹介している。やはり歌詞の内容をしっかりと把握させることがねらいだ(福田1981)。

なお英語の歌でなく「日本の歌を英訳して教材に」という実践が紹介されている。「北国の春」にはじまり、「荒城の月」「さざえさん」「ドラえもん」等、子どもたちが歌ってみたい歌を英語にしていく。長期休んでいた子どもが「サザエさん」の英語バージョンを歌って元気になったことも紹介している(高垣俊雄1993)。

歌の内容に係わって特筆すべき実践がある。広島養護学校(現在の特別支援学校)において、水俣病の被害にあった松永久美子さんのことを歌った「We Can Stand」を学んで、障がいを持った子どもたちが「自分たちができること」に目を向け、生きることを確認したというものである(茂木1977)。

以上の報告は、母語だけでなく英語の歌も、やはりその歌の持っている意味を理解することが重要である事を示している。

(4) 文化を学ぶという視点から

NHK の語学番組として基礎英語や続基礎英語

等において英語の歌を導入し、カセットテープが使われ始めた1970年代の初めに英語の歌のテキストとテープが販売された。そのまえがきで川島正二氏は「英語の歌は、それを歌った時代の人の気持ちや考えをよく表しているし、歌う人の情緒や感情を、率直に伝えてくれます。英語を学習する目的は人によってまちまちでしょうが、歌を通して英語使用国の文化を知るということは、誰にとっても無駄にならない楽しい勉強だと思えます」(川島正二1973)として文化を学ぶという視点を提供した。上村敦氏は‘A House of the Rising Sun’を通して子どもたちにアメリカの低層にいる女性達を考えさせた(上村1984)が、文化的な背景を学ぶという視点が位置付いている。

(5) 英語力に関わって

歌を英語の授業に取り入れる理由として、英語力のアップを前提にするのはいうまでもない。多くの先生方が文法の説明のために歌を活用し、現在完了形ならばこの歌のこの部分、受動態ならばこの歌などと活用している。語いや熟語なども視野に入れて歌の書き取りテスト等を行っている報告も少なくない。生徒、学生からするとせつかつたのしい英語の歌が、文法の説明でつまらなくなるという声も聞かすが、教師としては譲れないところである。かつて30曲を選んで高校までで学ぶ文法項目が全てはいっていることを確認したことがある(瀧口1994)が、文法を意識化して教えれば歌が主教材になることにもなる。上述の福田氏はロック音楽を主要教材として授業を組み立てている。

(6) 英語音声を学ぶ視点から

英語を音読することについては古くから授業の中で取り入れられ、テープのない時代でも教師の後に続いて英語を読むコーラス・リーディングは行われていた。英語の音声は強弱のイントネーションであるが、日本語は平坦な音調である。日本人にとって英語のイントネーションを身につけるのは困難である。しかし歌を上手く歌うということを目標にすると、どうしても英語のイントネーションを身につけなければ上手く歌えない。

前述の山門義武氏は、教科書の英文を読むあたってバックグラウンドミュージックにロック音楽を流し、そのリズムで音読をすすめるという手法を紹介している(山門義武1980)。必ずしもその曲の歌詞とメロディーとは限らない方法である。

6. 考察と課題

以上英語教育における歌の意味について、戦前からの実践を踏まえつつテーマを絞って検討してきたが、以下まとめと課題を提示したい。先行研究では、英語の歌を授業に取り上げる方法については出されているが、英語教育における歌の活用の意義についてまとめたものは見つからなかった。本研究はその意義について焦点をしぼり、6点にわたってまとめたものである。

英語教育における歌の意義については、戦前、あるいは戦後も1970年代までは動機付けなどの役には立つが英語そのものの力になるとは考えられなかった。実際に授業でも使われることはほとんどなく、実践としても限られていた。ただし中学校の英語検定教科書では1960年代から古い歌が載せられていたという事実があり、教科書編集者としては英語の歌の意味を感じていたのではないかと推測される。1980年代以降は実践的にも積極的に取り上げられ、効果としても実感できるようになり、多くの教室で取り上げられるようになった。教育機器の発達で教室に持ち込みやすくなったということも大きなインパクトとなっている。検定教科書の中にも本課の中に歌を取り上げているものも出てきており、歌が教材の主流として位置付いてきた。

英語の歌と言っても膨大な数があるが、授業実践を通して子どもたちにふさわしい歌が選択され、歌詞の意味やメロディーなどが重要な意味を持っていることが実践者に認識されてきている。中学校3年間歌を位置づけた上村敦氏をはじめとして、多くの先生方が3年間を見通し、季節や行事に合わせて歌を取り入れていることも行われている。発展期や転換期、あるいは次の節で取り上

げた中学校や高校の実践を見れば、英語の歌が教師にとって授業を構成する基本の資料となってきたことが実践的に増えてきている。

教科書の本文は学習者の学年やレベルに合わせて編集されている。高校ではそのまま原文が教材として使われている教科書もあるが、中学校や英語が苦手な高校では易しく書き換えてあり、原作の機微が消えてしまうものがある。しかし歌の場合は、歌詞やメロディーをそのまま扱うので機微が失われてしまうということはない。もちろん歌詞の持っている意味をしっかりと理解するかどうかは指導者の授業にかかっているのだから、必ずそうなるとは言えないが歌詞そのものは変らない。教材がオーセンティック（真正な）ものであることも重要な意味がある。

本論文の問題意識である「英語の歌を授業に活用する意義」であるが、メロディーとともに定着する言葉が長期にわたって保持され、英語の力として位置付くということであれば全ての授業に取り入れる意味もある。もちろん子どもたちの中には歌が苦手で歌うことができないというケースもあるが、Tim Murpheyの説「音楽が頭に残る自然現象」もしくは「音楽的な鳴り響き」によれば、聞いているだけでも定着することは確かであり、実践的にはクリアできる。メロディーとともにその時代の自分の感覚や感情、あるいは景色が浮かび上がってくるという体験が語られる。子どもたちが10年後、20年後に英語の教師に出会ったときに、歌と共に授業風景を語ることもある。科学的な根拠はわからないが今後の検討課題である。

その他英語の歌を授業に活用する意義として、前述のように内容を学び文化を学ぶ、英語力に資する、そして英語音声等を学ぶ等も重要な視点である。それぞれの意義について更に論を深める必要がある。

<参考・引用文献>

・浅川和也他（1997）英語教育における国際理解教育の事例Ⅱ－メッセージのある英語の歌を

使って 大学英語教育学会第36回大会要項、pp.481-482

- ・岩下いずみ（2016）「高専における洋画・洋楽・ドラマを用いた授業実践報告」映画英語教育研究21巻、pp.45-58
- ・宇野智之（2007）「英語の歌のある授業」新英語教育452 三友社出版、pp.13-15
- ・円城由美子・平野牧子（2014）「英語教育における翻訳の役割：歌詞の翻訳指導の実践から」大阪女学院大学紀要10号、pp.47-65
- ・小美濃博（2018）「中学校の授業で、英語の歌を使って」新英語教育591 本の泉社、pp.14-15
- ・大内修二郎（1936）「課外英語指導の一例－女学校の場合」『英語教育史資料2巻』東京法令出版
- ・垣田直巳（1960）『英語のレクリエーション』大修館書店
- ・梶木隆一（1956）「外国語教育」『第6次教育研究全国集会報告書』国土社、p.86
- ・上村敦（1970）「Folk Song を授業に取り入れて」新英語教育84 三友社出版、pp.20-24
- ・上村敦（1980）「『英語教育と歌』—その意義と効用」新英語教育125 三友社出版、pp.24-25
- ・上村敦（1982）『たのしい英語の歌』三友社出版
- ・高垣俊雄（1993）「日本の歌を英訳して教材に」新英語教育282 三友社出版、pp.22-25
- ・瀧口優（1994）『高校生のためのポップス英文法』筑摩書房
- ・角田忠信（1978）「外国語学習と音楽」言語10月号 大修館書店
- ・寺島隆吉（1987）「英音法の考え方・教え方」『新英語教育講座14巻』三友社出版、pp.28-44
- ・寺島隆吉（1986）「大学にも歌声よ、おこれ：英語の歌を通じて英音法をどう教えるか」新英語教育206 三友社出版、pp.20-23
- ・野津文雄（1933）「女学校英語科授業の実際」『英語教育史資料2巻』東京法令出版
- ・羽鹿諒・山西良典・ジェレミー・ホワイト（2018）「空

- 耳フレーズを用いた外国語発音教育に向けた一検討」情報処理学会論文誌59 (1)
- ・長谷川潔・小池直己 (1985)「放送英語の教育的効果に関する研究 (IV)」日本教科教育学会誌10 (3-4)
 - ・畑江美佳・段本みのり (2017)「小学校におけるアルファベット指導の再考:一文字認知を高めるデジタル教材の開発と実践一」小学校英語教育学会誌 17(01)
 - ・服部公一 (1989)「ことばとメロディー」新英語教育 NO.234 三友社出版, pp.6-8
 - ・早瀬光秋・金治隆司 (2005)「英語学習の指導における『かな表記』による英語ポピュラー・ソングの導入」三重大学教育実践総合センター紀要25号
 - ・早田武一郎 (1994)「大学英語教育における英語の歌の効用」和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要 NO.3
 - ・樋口ありさ (2018)「Second Language Vocabulary Learning: Whether Western Music is Effective for Incidental Vocabulary Learning」東京女子大学言語文化研究27, pp.1-22
 - ・福田昇八 (1981)「ロックを使った英語授業」英語教育30巻9号 大修館書店, pp.72-74
 - ・福田昇八 (1993)「英語の歌と英語教育」新英語教育 NO.282 三友社出版, pp.8-11
 - ・星山三郎 (1933)「女学校における英語教授」『英語教育史資料2巻』東京法令出版
 - ・松浦千佳子・甚目裕夫・西田智裕・伊藤孝紀 (2018)「歌を利用した英語コミュニケーション教育の報告」平成30年度日本工学教育研究講演会論文集
 - ・松峰隆三 (1960)『英語の入門期』大修館書店
 - ・水田清恵 (1935)「師範学校参観印象期」『英語教育史資料2巻』東京法令出版
 - ・茂木節子 (1977)「We Can Stand の学習」新英語教育 No.91 三友社出版, pp.53-58
 - ・山門義武 (1980)「歌の授業」新英語教育 No.125 三友社出版
 - ・山本健治 (1989)「It's Your Dream は最高！」新英語教育 No.234 三友社出版, pp.17-19
 - ・吉浦潤次 (2014)「高校『歌とドキュメンタリー』そして『字幕翻訳』の取り組み」新英語教育 541
 - ・米蒸健一 (1980)「歌を自主教材として」新英語教育 No.125 三友社出版, pp.26-27
 - ・Maria C. M. de Guerrero (1987) The Din Phenomenon: Mental Rehearsal in the Second Language Foreign, Language Annuals, 20, No.6, pp.537-548
 - ・Terry LASKOWSKI (1995) Using Songs in The Classroom: Enhancing Their Educational Value 全国英語教育学会紀要 6(0)
 - ・Tim Murphey (1990) The Song Stuck in My Head Phenomenon: A Melodic Din in the LAD System Vol.18
 - ・William COLLINS (2018) Songs as a Tool for Developing Students' Descriptive Writing Skills 長崎大学言語教育研究センター研究論集 第6号, pp.63-72